



萩市須佐地域

公民館だより

令和8年

9月

第638号

須佐地域生涯学習推進
マスコット「まな坊」

※題字は昭和48年発刊第1号時のもの

**集おう！学ぼう！
手をつなごう！**

発行/須佐公民館 〒759-3411 萩市大字須佐4570-1 Tel.08387-6-2310 FAX08387-6-2030
弥富公民館 〒759-3302 萩市大字弥富下4043 Tel.08387-8-2044 FAX08387-8-2212
特定非営利活動法人 須佐元気なまちづくりネット



手作り器と箸でそうめんを食べる子ども達：須佐のびのび教室

《今月の話題》

○夏休み子ども達は・・・

恒例そうめん流し体験

放課後子ども教室・・・・・・・・・・1、2P

○「お帰り！」帰省者と過ごす盆・・・・・・・・・・3P

○特集：対談（後編）

昭和を振り返って・・・・・・・・・・6～9P

○公民館奮闘記「NPO法人が始動」・10P

○山岡保治の今昔物語③・・・・・・・・・・12P

夏休みに突入!



体験学習を満喫する子ども達

さあ、子ども達にとつて嬉しい夏休みがやってきました。一年で長い夏休みを、子ども達はどのように過ごしているのでしょうか。

須佐地域内の子ども会や公民館では、子ども達が楽しい夏休みの思い出となるような企画を用意しました。

竹細工とそうめん流し

須佐のびのび教室

8月7日(金)、毎年恒例の「そうめん流し」を須佐公民館で開催しました。会場をいつもの久原園地で開催する予定でしたが、今年は例年になく猛暑が続いており、熱中症予防のため急ぎ須佐公民館前で開催する運びとなりました。

最初は竹細工で、そうめんを食べるための器と箸を作りました。須佐地区で活動されておられる、コミュニティ須佐の皆さんが事前に竹を準備して下さり、その竹をのこぎりで切って作ります。

子ども達は3班に分かれ、コミュニティ須佐の皆さんのご指導で、のこぎりの使い方や箸を作るための小

刀の使い方を学び、自分の器と箸を上手に作っていました。

中には、のこぎりで悪戦苦闘している子どももいましたが、そこは、指導者の方が「こうしたらいいよ」と丁寧に教えて下さったので、最後



協力して竹を切る子ども達

まで頑張って仕上げる事ができました。今年は、竹細工の時間が早く終わり、そうめん流しまで少し余裕もあったので、使った道具やブルー



地域の方に見守っていただきながら箸づくり

シートなどを、みんなで一緒に片づけることができました。

公民館の外では、大人の方が、竹細工開始と同時に、そうめんを流す竹樋の設置を行っていました。

そして、いよいよそうめん流しです。そうめんと具材は、2階の調理室で女性の方に準備していただきました。竹の器につゆと具を入れ、竹箸を持って竹樋の横へ並んだ子ども達。さあ、食べる準備オッケ!

竹樋の上からそうめんが流れてくると、子ども達は素早く竹箸でそうめんをすくってつゆをつけて、美味しく食べる始めました。そんな中、器の中いっぱいにはそうめんがあるのに、まだそうめんをすくおうとする子どもいたので、「器の中のそうめんを食べてから」と注意を受ける子どももいました。そうめんだけでなく、

ミニトマトも流れてくると子ども達は大喜び。「トマト、トマト!」と箸を構え、とり損ねると「あつとれんかったあ!」などと大騒ぎ!それでも、今年は地域の方からたくさんミニトマトを頂き、子ども達だけでなく、大人も食べることができました。お腹いっぱいになると、子ど



手作りの器と箸で食べるそうめんは格別!

も達はじつとしていられず、午後からの放課後子ども教室の部屋へ行こうとするので、デザートのスイカも切って食べました。

子ども達の感想

「のこぎりは、初めて使ったので難しかった。そうめんは、何度も何度も流れてきたけど、僕は右ききなのに左側に立っていたから、そうめんがとりにくかった。でも、食べたそうめんは美味しかったです」

地域外へ見学体験ツアー

弥富放課後子ども教室

8月5日（水）、地元の小中学生が参加し、山口県立博物館とサファリランドへ行きました。

山口県立博物館では、夏休み企画「山口昆虫発見隊」と題して、山口県に生息する昆虫について学び、実際に昆虫を観察する体験をしました。展示の目玉である、半分オス半分メスのレアなクワガタの標本も見ることができました。山口県にはめずらしい昆虫も多く、子ども達は熱心に観察していました。

その他にも、「昆虫お絵かきパラ



山口県立博物館で記念写真

ダイス」と題して、自分たちが描いた昆虫を大型スクリーン上で動かして遊ぶこともできました。子ども達は、スクリーンの前で自分たちが描いた昆虫を楽しそうに追っかけまわしていました。

博物館の後は、昼食に西寺水神公園（美祢市）の、夏の風物詩であるそうめん流しをみんなで楽しみまし



モルモットを抱いてあやす女の子

た。夏の暑さの中、涼しげな流水とともに食事をする楽しいひとときとなりました。子ども達は流れてくるそうめんを箸で上手にすくって食べていました。

午後からは、サファリランドの動物ふれあい広場に行きました。モルモットや犬、猫などさまざまな動物とふれあいながら自然と動物のつながりを感じることができました。

大変、暑い一日でしたが、子ども達は元気いっぱい、楽しい夏休みを体験することができました。

作って楽しむ夏休み！

須佐放課後子ども教室

一方、須佐公民館で夏休み教室を開いている放課後子ども教室では、いろんな工作や、クッキングなどで夏休みを満喫しています。

工作では、牛乳パックとペットボトルを使って飛行機作りや船を作って水の上で走らせたりしました。また、プラスチックダンボール工作やタイル工作では、作るのは少し大変だったけど、出来上がった時の子ども達は「見て見て！出来たよ！」と達成感に満ち溢れていました。

クッキングでは、氷と塩を使った実験を兼ねながら作り、その場ですぐに食べられるアイスを作りました。小さめのジップロックに材料を入れ



手作りの船をゴムの力で動かす子ども達



ブンブン振り回してアイス作り「疲れる～」



てふたを開め、それを氷と塩の入った大きなジップロックに入れてふたを閉め、最後に大きなタオルなどにくるんで、1分ほどブンブン振り回すと材料が混ざって固まり、アイスが出来上がります。

子ども達は、1分も立たないうちに腕が疲れ、少し時間がかかっていましたが、ジップロックのふたを開けてみると、ちゃんとアイスが出来上がっており、溶けないうちにすぐ食べていました。

午前中と同じ要領で作って凍らせたアイスと触感を比べてみると、「凍った方がシャリシャリしておいしい」という子もいました。今回は牛乳を使って作りましたが、ジュースなど応用も効くので、ぜひ自宅でも親子で試してみてください。

まだまだ前半。後半の様子は、次号で紹介します。お楽しみに。

帰省者と盆のわんぱく



皆さん、お盆はどのように過ごされましたか？久々に帰省されたご家族やご友人とともに、賑やかな時間を過ごされたのではないのでしょうか。さて須佐地域では、8月14日（金）と15日（土）、各地区でスポーツ大会や盆踊り大会が催されました。

ソフトボール大会で交流

8月15日（土）、須佐グラウンドで恒例の「須佐地区ソフトボール大会」が開催されました。帰省者を含む須佐地区から3チームが参加し、中学生から70代まで幅広い世代が集まりました。

試合はリーグ戦形式の総当たりで



中学生女子投手は、打者との二刀流で活躍

全3試合が行われました。基本は誰もが打ちやすい、ゆっくり投げるスローピッチルールですが、帰省中の中学3年生の女子投手が本格的なウインドミルで投げ込んで打者に猛攻撃を仕掛けたり、メジャーリーガーのようなたくましい帰省者の方が豪快なホームランを2本放ったりと、迫力ある好プレーが次々と飛び出しました。

周りからは「ナイスプレー！」「格好いい！」と大きな歓声や声援が飛び交い、「やって楽しい、見て楽しい」大会となりました。水分補給をしっかり行い、熱中症も出さずに無事終了。来年もまた皆で楽しく集えることを期待しています。

【大会結果】

優勝

②ブロック

参加集落（本町・河原丁・

山根丁東）

準優勝

①③ブロック

参加集落（松原・入江・

山根丁西）

3位

④ブロック

参加集落（水海・下三原・前地）



スマホで読込

各地区で盆踊り



〓 弥富地区・鈴野川地区 〓

8月14日（金）、毎年恒例の弥富盆踊り大会が弥富支所前で、鈴野川盆踊り大会が農林漁業等健康増進施設で行われ、多くの参加がありました。弥富地区では、開会式や新盆供



大人の後ろについて踊る子ども達

養の後、やぐらを中心に、輪になって八手踊りを踊りました。踊り方がわからない人も上手な人の踊りを見ながら踊るうちに、みんな上手に踊ることができるようになりました。

今年は、子ども達の参加も多く、やぐらの周りには例年にないほどの大きな輪ができました。

また、今回は帰省客も多く、久しぶりの再会など、日頃とは違う交流に盛り上がりを見せました。来年も皆さんと笑顔でお会いできることを願っています。

〓 須佐地区 〓

一方、8月15日（土）、須佐文化センターホールで開催された盆踊り大会でも、先に新盆供養が浄蓮寺住職によって執り行われました。

そして盆踊り大会。最初は恒例の「愛の輪音頭」を2回踊り、その後、盆踊りが始まりました。踊りが分らない人のために、澄岡公代さん（浦東）が踊り方を教えて下さり、踊っていくうちに、参加された皆さんも、だんだん踊りが上手になっていきました。浴衣を着た子ども達も多く、周りの人が踊るのをまねて一生懸命踊っているのが印象に残りました。来年も多くの皆さんの参加をお待ちしております。



スマホで読込



帰省者の家族とともに楽しく盆踊り

公民館学級

手作りうどんに満足!

弥富公民館



7月17日(金)、弥富9区の齊藤洋子さんをお迎えし、「我が家の手作り教室」を開催しました。今年度から教室名を新たにし、第1回目は手作りうどんに挑戦しました。

うどん作りに必要な材料(3人分)は、中力粉300g、水又はぬるま湯135〜145ml、塩15g、打ち粉少々です。中力粉に塩水を加え、生地をこねる作業では、力が必要で「思った以上に大変」という声も聞



皆で力を合わせて生地をこねる様子

かれましたが、皆さん声を掛け合いながら一生懸命こねられていました。こねた生地を寝かせている間に、ぶっかけうどんにのせる甘辛い肉を作り、かまぼことネギを切るなどの準備をしました。また、きゅうりとサバ缶を使ったさっぱりとした酢のものも作りました。

寝かせた生地は、めん棒で丁寧に伸ばし、打ち粉をしながら折りたたんで麺切包丁で均一の大きさに切っていきます。「ゆでたら膨らむから出来るだけ細くね」と皆さん、真剣な表情で取り組まれていました。

切り終えたうどんをたっぷりのお湯でゆで、氷水でしっかりと締めた後、器に盛りつけます。肉やかまぼこ、ネギに加え、齊藤さんが事前に準備してくださった煮卵をのせ、美味しそうなぶっかけうどんが完成。早速、できたてのうどんをいただきました。「コシがあつてとても美味しい」「家でもぜひ挑戦してみたい」と参加者。手作りならではの美味しさを実感することができました。

今後も家庭で気軽に楽しめる料理をテーマに開催していきますので、多くの皆さんのご参加をお待ちしています。



美味しく出来上がりました!

生き活き教室

夏のブローチ作り

つどい会



8月5日(水)のつどい会は、須佐の皆さんはよくカバンや服に可愛いブローチをつけておしゃれをされているので、ヒマワリのブローチを作ってみました。黄色のフェルトと茶色のフェルト、ホットボンドで作りました。



黙々とブローチ作りに励む参加者

ひまわりのブローチは4ステップで簡単に作れます。

①ガイドラインに沿ってそれぞれのパーツを切る

②ひまわりの真ん中のパーツを半分

に折り、輪の部分に切り込みを入れ、端からくるくる巻いていく

③②のパーツに花びらをホットボンドで張り付ける。

④裏側にピンをホットボンドとフェルトで張り付けて完成です。



ブローチ出来た!

ひまわりの花びらのフェルトは黄色の布地に赤いペンでガイドラインを書いていたので切りやすかったのですが、ひまわりの真ん中の部分は茶色の布を使っていたので、赤いラインが少し見えにくかったみたいですが、皆さん楽しんで作っていました。

時間の関係で一人一つだけ作りましたが、皆さん「可愛いねえ」「服につけても目立っていいね」「私はカバンにつけて使おうかな」と楽しそうに話されていました。須佐の町で可愛いひまわりのブローチを見かけることがあるかもしれませんね。

今月のランチは、ナスのキーマカレー、キャベツのコールスロー、夏ミカンサイダー寒を作りました。

ピリッと辛いカレーが食欲をそそり、皆さんペロッと完食されていました。



野菜たっぷりのカレー

特集 対談

昭和を振り返って (後編)

次の時代に残したいモノ



前回からつづく

○司会

本当に昔は飲む機会が多かった気がします。

私事になりますが、須佐から弥富に帰りコロナが流行り、おまけに飲酒の嫌いな集落の担当者になると全く地域の新年会などの飲み会は、無くなりました。

これでは、集落の集まりどころかコミュニケーションが無くなると危惧したので、昨年集落の公民館前に植えた桜が満開になったことを切っ掛けに、花見をすることにしました。そうすると久し振りに多くの人が集まりました。

○品川石和さん

本当に、大人と大人が本音で語り合える場が少なくなってきた感じがします。是非あっちこっちで語る機会が増えるといいですね。

○山本浩之さん

人と人、大人が楽しそうに飲んでいる姿が、子どもながらにとっても楽しかった思いやそんな風景を最近見ることが少なくなってきました。

本音が言えるのも昭和の風景・雰囲気だったのではないのでしょうか。

○福島友美さん

小学校の時、私の家には誰かがいました。知らない人が来ていたことも・・・？
玄関はいつも開いており、みんなが見守ってくれていました。そんな環境で育っていました。

おじちゃんおばあちゃん近所の人温かく見守ってくれていた気がします。

しかし、今は過保護なくらいにダメという事が多くなってきたと思います。

す。私は、

お父さん世代を生きて

きた人、年上の人も話すことが出来る世代かと思っています。

分かるうとする狭間(はざま)に居るのが私たちの世代なのかも知れません。

○司会

「都会には都会の良さがあるが、田舎の良さって何だと思えますか？」

そして、その良さを、次世代に残すモノとしたらどうでしょうか？

本当に残したいモノがいっぱい

○石田憲雄さん

丁度萩市を境に弥富の神楽も6調子で残っています。ここにある文化が残るって良い事だと思います。

上三原田

植えばやしも残ってほしい。花火大会との関連はなくなりましたが、船唄も何らかの形でどうにか残していきたいものです。



一時復帰した子ども神楽

良いものは沢山あります。あるモノを何らかの形で残していきたい。コミュニケーション、ノミ(飲み)コミュニケーションもしっかりやってほしいです。

色々な文化があるので、しっかり文化を楽しみながら残して欲しいものです。

子どもの頃、花見と言えば八幡様の所に御座を敷いてやっていました。こうしたことが、やればできると思うが、出来なくなりました。

そういうことを、1つでも出来るようになり、続ける事で昭和の事を

1つでも良くなる。こんな田舎で生まれ、こんな田舎で一生楽しく暮らせればこれ以上の幸せはないと思います。

お互いが楽しみながら、やらせるのではなく、やっていくことで楽しい場がもて、参加者は楽しくなると思うんです。

○林和哉さん

大人が本気で話をしている場面も是非子ども達にも聞かせてほしいものです。

ある大学の先生によると、子どもたちが地元に残りたくなる要因の1つとして、子どもたちと大人が本気で関わり合う事が挙げられるそうです。これは、昭和の時代には普通に存在した姿ですが、今は失われつつあるものなんです。

子ども達と大人達が本気でコミュニケーションをとれる環境があるかどうかで、環境は変わります。



須佐地域の未来が変わるといつても過言ではないと思いますよ。

今後は是非とも残していきたいものは、昭和の人情味あふれる、少し暑苦しいくらいの世代間のコミュニケーションですね。

○本尾信雄さん

「萩市須佐の将来残すべきもの」

このことをAIに聞いてみました。



圧倒的に出たのは、日本ジオパーク、豊かな食と伝統産業、地域を支えるコミュニティ、具体的には須佐のコンプライアンス、須佐湾、食ではみこととか、弥富そば、須佐唐津焼、神楽文化、そして拠点施設の活用などがあがってきました。

多分情報が文書化されたのだと思います。

参考にして下さい。

○司会

さすがAIです。ちゃんと情報だけは綺麗に分類しているんですね。

AIに頼れば、これで対談は終わってしましますが、人間の頭で考える事も必要ですね。

○西川さん

残したいものとして、須佐地域に今何があるのですかねえ。

○司会

須佐には、形のあるものとしてホルンフェルスとか、形がないものとして神楽や田植えばやしといったものがありますねえ。

○西川さん

下三原の神楽、祖父ちゃんの頃には踊れば死んでもいいと言わんばかりで、昔は本当に何もなかったかなのでしょね？

今はそんな時代ではないし、私は浜の生まれで、神楽や田植えばやしは初めて見た、神楽も何らかの形で伝えることができたら良いと思います、いい方法があれば教えてください。

○品川さん

確かにAIも良いけど、人間が創り上げた確かなモノは大切にしなければいけませんね。

弥富に伝わっている神楽というのは、舞はもちろんですが、それを補佐する太鼓や笛などの技術は必要不可欠なものです。

私の子どもは中学校時代に習った神楽が役に立ち、現



在他地域で重要文化財に指定されている神事の笛を吹いています。

ここだけでなく、地域を替わっても役に立つことは良い事だと思っています。

また、私は、個人的にかやぶき屋根のふき替えの仕事を継承しています。今個人で山口県の中で出来るのは1〜2人くらいで、うちのような団体で出来るのは、今弥富だけしかないのが現状です。

仕事は、あるのですが、みんな高齢で一番若いといっても私くらいで、この技術を後世に残すための後継者育成が、私の当面の課題であり役割だと思っています。

○西川さん

カヤ(茅)は弥富で刈られているのですか？

○品川さん

昔は、カヤ場という処があり、そこでカヤは調達していたのですが、今は竹藪になってしまいました。

そこで、カヤの確保を休耕田を利用し毎年カヤを刈っています。

2〜3mに伸びたカヤの束を200束くらい確保していないと1回の仕事ができないのです。

○山本さん

今須佐に住んでいながら弥富で神楽を教えてもらっています。

須佐の祭り、スポーツ振興会、子ども会、この前は鈴野川のほたる祭

りであったり、参加して楽しいものは残していきたいと思っています。

田舎だけでなく、人として残したい良い意味の「愛おしさ」があり、周りの方に話掛けられ、あいさつをし、人に声を掛けられてきた。

子ども頃



山本浩之さん

は、近所の人に声をかけられることが結構うつとうしかった(思春期だった)もんですが、今思うと挨拶をし、怒られ、人間として大きくなってきた。便利な世の中になってきたが、人との付き合いは残していけたらと思います。

そこら辺を踏まえて、うつとうしくなくなってきたのではないかと思います。

○西川さん

でもね、おばさんらは子どもたちに声かけるのが怖い所もあるのです。小学生は良いけれど、中学生とかになると、(思春期の子どもとか)逆に怖いかも・・・？

○福島さん

顔を知らない人に声を掛けられると本当に怖い。最近結構事件や事故が頻繁に起こっているの、疑うのではないけど、本当に隣近所でも結構怖いかも・・・？私が須佐に嫁いで10年くらいなりますが、子ども

達が生まれ育った町なので、将来仕事も無い中、田舎にずっと居れとは言えない。しかし、子ども達が帰ってくる町であってほしい、帰ってこれる魅力のある町であってほしいと思います。



山本浩之さん、福島友美さん

結構須佐には、美味しい魚や野菜など、種類は豊富で残せる素材も沢山あるので、私はそれを生かした製品を作っていきたいと思います。

(司会)

ここで今回の対談の中で、意見を調整するコーディネーターとして、お二方に参加して頂いています。まず、弥富公民館の廣兼健一さんです。宜しくお願いします。

○廣兼健一さん(青葉台)昭和46年生まれ。

皆さんの意見を聞かせていただいた中で、昭和らしい面白い出来事と

して、品川さんの話、高度成長期の話の中の話なのでしょうが約10年間で給料が3倍になったという話は、本当に良き時代の話だったのかもしれない。

そして、皆さんの話の中で共通する部分は、人に関する部分だったような気がします。

山本さんの住民との関わりかたの話、福島さんの家族間での話は、現在忘れ去られた、人と人・家族のふれあいの希薄さが、昭和という泥臭さを失くしているのかなと感じました。



廣兼健一さん

また、石田さんや品川さんからは、人とのつながりの中で、行事があるたびに飲む機会が多くコミュニケーションは、ノミニケーションといった良き時代の大人の付き合いだった話でしょうかありました。

(司会)

貴重なご意見ありがとうございます。

続いてもう一人のコーディネーターとして、萩市の地域おこし協力隊として、須佐公民館で頑張ってもらっています。今日は昭和100年を振り返ってみて、一番若い平成生まれの方です。新しい感覚で、昭和100年を振り返ってみてみたいと思います。それではよろしくお願いします。

○山本一貴(本町上)平成3年大阪市生まれ。

私を感じる

昭和100年、特に平成は、変わる時代

だったと思います。

和つて、高度

成長期もあつて、何でもかんでもイケドンドンの時代ではなかったかと思っています。

昭和の過激な流れの中で、その流れを落ち着かす流れが、平成時代ではなかったのかと思います。

今は田舎と言えども情報は沢山キヤッチできる。ものの豊かさをしっかりと受け止め、適応する社会を自分なりに作って行く必要があるのではないかと思います。

子どもが帰ってこれる場所づくりは、今から求められることかなと思います。そのためには、まず自分がこの地に定住することで、公民館に集う場所を作りたいと思います。

○西川さん

大人の中に子どもが入る、そういう世界に、子どもにも大人の世界感を作ることが必要かも分かりませんね。今日は、皆さんからの沢山の意見を頂き、本当に勉強になったと思います。

(司会)

それでは、大変お忙しい時間帯にお集まり頂き、貴重なご意見を頂き



山本一貴さん

ました。

誠にありがとうございます。

今から出されたご意見を一つ一つ拾い集め、昭和100年の意見として「対談」の取りまとめをしたいと思っています。

昭和に生れて良かった！

まず皆さんの意見を聞き、最初に感じたのは、昭和・平成・令和の長い間に、私たちは数多くの喜びや悲しみを味わう事が出来たことは、昭和に生れたことに一番に感謝しなければならぬと思いました。

運悪ければ、先の戦争で亡くなっていたかもしれませんし、その先祖が命を落としたかもしれません。また最近では、13年前の豪雨災害で命をおとしたかも知れません。本当に奇跡の中で生き延びた、昭和100年だったような気がします。



熱心に対談される皆さん

したがって、私たちは、この100年間で学んだ事は、計り知れない情報量を持っていますが、これを住民や友人一人一人に伝えることは不可能に近いものと思われまふ。

しかし、皆さんと語り合つたことは、この対談というコーナーの一つとして書き残していかなければなりません。



対談の様子

昭和で感じるもの…

昔は良かったと誰しもが、口を揃えて言いますが、アナログ世界で何もなかった戦後の食糧も、芋一つだって貴重な美味しい食べ物だったと思います。

私たちは、昔、昭和を振り返ることによって、昭和時代の豊かさをもう一度考えなければいけないのかもしれまふ。飽食の時代と言われた、

昭和45年頃から食べ物に豊富にあり、いつでも好きな物を選んで食べられるほど物質的に豊かになった時代でしたが、その反面では栄養バランスの乱れや食品ロス、健康問題など多くの弊害も生まれた昭和時代でした。

「須佐の昭和」って

何だったのでしょうか？

須佐町の昭和時代、人口も今とはケタ違いで、多くの人でごつた返していた祇園祭りや弁天祭り、そんな祭りがあるから、人々は集い、夏祭りが賑わい、人と語り、酒を酌み交わし、酔いしれる住民等も多かった、それが須佐の祭りでした。

昔だけを懐かしんでいても、かつての賑わいは戻ってきまふ。

昔を振り返り、けつして裕福ではなかつた時代の、人々の唯一の楽しみは、年一度の祭りなのではないでしょうか…。



司会進行の吉田 満

昭和100年を3つに細分化

ここで、昭和の時代を3つに細分化し、私なりに総括してみたいと思います。まず最初に、①昭和をテーマに、残っているモノを次世代に引き継ぐこと。

例えば、近世の歴史的遺産、具体的には、写真・映像・風習・故事など、私たちが身近で接していた文化が中心となります。写真や映像は、昭和須佐町を知る貴重なものです。

すでに個人的には、須佐町の広報やPTAの冊子などはデータ化が進んでいます。また、長年昭和の風景を写真におさめておられた山岡保治さんのデータ化も進めています。これらは、昭和100年の貴重な財産ですので、永久に保存しなければなりません。

次に②昭和・平成の時代、現在進行形の中で、今は無くなつていないものが地域では大切なモノだと、皆さんの意見が一番多かったモノです。例えば神楽や田植えばやしなどの伝統文化や須佐唐津焼やカヤぶき屋根の伝承技術の継承などがあります。後継者不足で中々前に進まない時期にきていますがどうか後継者育成などの手立てを勧めることが望まれています。

最後に、③昭和100年の遺産を次世代に引き継ぎたいソフト的な感覚です。残したいという気持ちがあつても結局誰も居なくなれば、次世代どころかすべてが終わつてしまふます。

例えば、生まれ育つた地域を残し、将来帰つてくれる故郷を作りたいとの環境づくりを、地域・家庭から押し進める必要があるかと思ひます。

将来生まれ育つた地域で暮らしたいという積極的な活動を行っている地域は少なく、一定の評価を得ている先進地もあります。そのためには、まずは家庭の環境を作る必要があります。

素晴らしい地域を残してあげるのも私たちの役割ではないでしょうか。わずかの時間を利用して、皆さんからの貴重な意見をまとめるに当たり昭和100年という大きなテーマでの度対談を行いました。

世代ギャップは色々あつたものの考え方は、一様に統一した意見を持たれている感覚を得ました。

皆さんから頂いた貴重な意見は、それぞれの場面で活かせる気がします。特に、次代を担う子ども達が、将来自信をもつて帰れる須佐地域を創ることが、私たちが本当に望んでいる地域なのかも知れまふ。

古い時代も大切ですが、将来の須佐地域を考える若い人達の考え方も大切だと思ひました。

最後に立派な締めが出来まふんですが、一連の対談の協力感謝申し上げ最後にお礼のことばとします。

おわり



須佐の名勝/ホルンフェルス・量ヶ淵



旧 須佐町中央公民館

須佐元気ネットが始動開始

特定非営利活動法人須佐元気なまちづくりネット設立総会が終了し、いよいよ山口県知事宛に法人設立申請が始まりました。この時ちよつとしたトラブルが発生、県の指導の元で作業を行っていたのですが、当時県の出先機関であった萩県民局に情報が流れていなかったと女性職員から指摘、行政間の複雑関係にうんざりする場面もありました。

申請手続きの難しさ

NPO法人設立申請が提出されてもすぐには法人の認証にはなりません。申請から2ヶ月間の広告・縦覧の期間を経てから、他の団体から意見がなければ承認になるという手順です。そして、承認後法人(会社)として、法務局にて法人登記と

なりますこの間を利用し、経営をするための財源(予算)の確定をしなければなりませんでした。

そのためには、地域課題を明確にし、課題解決のための事業をどのように展開するのかです。

全くの素人集団が、志ばかりが高く、一つのパズルを組み立ては崩すといった作業の繰り返しで、なかなか前には進みませんでした。

そんな折、



須佐元気ネットのロゴマーク

公民館を上手に活用できないかとの提案ありました。須佐は、その昔から地域おこしの中核として公民館が携わってきた事実があります。その公民館を活用して、人づくり・

まちづくりはできないかというものでした。

公民館の底力を活かそう

前項でも紹介しましたように須佐の公民館活動は、非常に古く戦後国の復興計画よりも7年早い昭和14年に始まり、戦中・戦後を問わず様々活動が展開されてきました。

人づくり地域づくりと言いながらも、一向に日陰の存在が今の萩市の現状です。どこかで、誰かが先頭に立ちこの問題を解決しなければ、地域課題なんてそう簡単には解決はできません。

まず最初に、須佐地域を、そして公民館を元気になりたいという思いが一番でした。どうせ高齢者しかない地域、元気な高齢者が何か生き甲斐を求め、心身ともに元気に暮らすことで、引きこもりや病院離れにもつながり、それはおのずと大きな社会貢献(行政の負担軽減)にもつながります。

これは、以前県外研修に出かけた徳島県上勝町の事例では、高齢者が生きがいを求める「葉っぱビジネス」にも似ており、高齢者の元気が、町全体の元気につながると言われていました。

高齢者が生き甲斐を持つ学級として新しく誕生したのは、「生き活き教室」で、元気に生きること、自分の持っている技量を活かすという学級です。従来の学級と違うのは、参加者無料に対して、有料制で開始したこと、その代り3人揃えばクラブとして活動が出来ます。現在手芸や卓球など13のクラブが自由に活動を行っています。



生き活き会員は最初からいっぱいでした

また、山口県は塩分の濃い食事と言われ、それに伴う合併症も多いと報告されているので、当初山口県立大学の指導の元減塩食に取り組む、独自の食事会「集い会」も開催し、心身共に元気な高齢者を目指しています。

ぶらぶら
タムラ

まち
の
あるき



タモリに負けずわが町を紹介

「ブラタモリ」ならぬ『ぶらぶら
タムラが、わが町を紹介します。

今回は、前回に引き続き「禁門の
変と須佐」須佐兵達の活躍を紹介し
ます。

禁門の変の結末は・・・

こうしたことから、禁門の変の最
終的な決着は、益田親施、国司親相、
福原元僣の三家老の切腹により、長
州藩の最大危機を三家老の命と引
き替えに乗り切ることとなりました。

須佐では小国融藏・大谷樸助らが、
三家老を救おうと、萩藩の諸隊と拳
兵、しかし、邑政堂（ゆうせいどう）
／益田家の領政の府）に制止され行
動を断念。そこへ親施切腹の知らせ
が届きます。悲憤（ひふん）にくれ
た、僕助や河上範三・津田公輔ら9

人は、親施の遺恨を晴らすため、慶
応元年（85）2月須佐を脱出。萩藩
の保守派と戦っていた諸隊の協賛
を得て須佐に戻り、心光寺で「回天
軍」を設立した。

■益田親施（32歳）は、支藩の徳
山藩に預けられ、元治元年11月12
日（11日夜12時頃）徳山惣持院（そ
うじいん）で切腹した。



益田親施幽閉賜剣之地碑

■国司親相（23歳）も、徳山藩に
預けられ、元治元年11月12日午前
1時過ぎ頃徳山澄泉寺で切腹した。



国司親相幽閉賜剣之地碑

■福原元僣（50歳）は、岩国藩に
預けられ、元治元年11月12日午前
7時頃岩国龍護寺で切腹した。



福原元僣幽閉之地碑

三家老の首級（しゅききゅう）は、広
島にあった征討総督府に届けられ、
首実検をした総督徳川慶勝（けいし
よう）により、幕府軍の解散命令が
発せられ、禁門の変はひとまず終結
したが、この戦いが火種となり2年
後の四境戦争（芸州口の戦い・大島
口の戦い・小倉口の戦い・石州口の
戦い）では大勝利となり、新しい世
の中へ長州は邁進したのです。

出兵した須佐兵を祀る社寺

こうした禁門の変は、遠く離れた
京都の地でのことであると言で
片づけることではなく、この戦いに
はこの須佐の地からも長州藩士と
して、領主益田親施公が率いる30
0人の隊兵が、祖国を守るために、
尊い命を犠牲にした、その人達を祀
る社寺仏閣が地元笠松神社をはじ
め地域内外に数々あります。

○笠松神社（須佐中津）



益田親施公を祀る笠松神社

- 新撰隊記念碑（須佐中津）
- 三蔭山招魂社（須佐山根丁東）
- 懸の古城跡（須佐水海未調査）
- 萩東光寺（毛利家菩提寺椿東）
- 京都上善寺「長州人首塚碑」
などです。

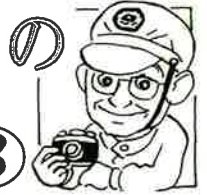
これは、ただ歴史上の出来事とし
ての認識だけではなく、我地域、我
町を守る、なにかなく私達の今日の
繁栄につながることであり、若い尊
い命をおとした志士の史実として、
後世に語り継いでいく債務のある
ことを思い知らせる次第です。
禁門に携わった多くの命は、現在
の須佐地域をつくりあげています。
この遺産も地域の宝として、繋いで
いく必要があります。（つづく）

昭和101年

ぽっぽや

山岡保治

今昔物語



カメラで昭和を追う・・・

懐かしい昭和を感じさせる一枚の写真です。／須佐中河原

お母さん達は、子どもの世話をしながら川で洗濯中です。

朝の下りの汽車が、萩に向けて中津鉄橋を渡ろうとしています。今日秋晴れの洗濯日和です。

昭和36年11月30歳の作品です。



村の風景（1961年山陰線須佐～宇田郷間）



2026年の須佐中川原現在



まいど！

地域おこし協力隊の山本です。須佐のみなさんの日々のちよつとした喜びをお届けするこのコーナー。

第3回目は、ご近所にお住まいのYさんから「うちで今、カサブランカがたくさん咲いてるよ。1回見に来てみたら？」と優しく声をかけていただき、早速お話を伺いに行ってきました！

ご自宅へ伺うと、鉢植えで2本のカサブランカが。普通は1本に5個ほど花がつくのが一般的らしいのですが、のぞき込んでびっくり！なんと、大体20個もの白い花がぎっしりと咲き誇っていたんです。漂う上品な香りもとても強くて、本当に見事でした。

このカサブランカ、実は去年、萩に新しくできたホームセンターで赤（一重）と白（八重）の球根を購入されたのだそう。赤は芽が出なかったそうですが、この白い八重は見事に大成功！これだけたくさんのお花を



須佐の皆様の
心温まるお話を
紹介します！



🌸 香りを
伝えられないのが残念

咲かせてくれて、Yさんとても嬉しそうでした。
「球根やから来年もまた咲いてくれるかね。でも、バイオ（園芸品種）やから、野良生えの百合とは違って来年は難しいかねえ、どうやろうねえ」と、来年の開花を少し心配しつつも、楽しみにされている様子にとってもほっこりした気持ちになりました。
育てる楽しさ、来年への期待が詰まったカサブランカ。僕も来年がどうなるか今から気になります。
Yさん、心温まる話題をありがとうございました！次回もお楽しみにー。
（7月17日取材）

こんなこともやってます！

・スマホクラブ

どなたも参加自由なスマホ教室 基本第1水曜

・韓国カフェタイム

韓国好きが集まり、お茶を楽しむ 基本第2日曜
お気軽にお問合せ下さい！



みこと君が昔の思いを伝えます

今回の碑は、弥富新市にある弥富ふれあい公園の県道を挟んだ前にあります。元々は弥富支所・弥富公民館の前庭に建立されていたのですが、平成10年同施設移転に伴いこの碑も移設されました。

この碑は、昭和29年12月1日に建立、弥富村の林業振興を後々語り継ぐことを目的に波放彩（はだほうさい）／郷土史家・民俗研究者）が村の功績を碑にしたものです。

現在石刻の文字は風化が激しく、はつきり読み取ることができませんが、過去の功績者の名前や功績が約10行にわたり彫り込まれています。

※波多放彩

主に山口県阿武郡阿東町・川上村・福栄村などの郷土史や民俗・方言を記録した郷土史家・民俗研究者で、『阿東町誌』『川上村誌』『萩の百年』『ふるさとのことば』などを著しており、主に昭和中期に活動していた人物といえます。一時期弥富地区にも住んでいたと言われている、その当時の活動が伝わっています。

その活動の中には、「弥富の歌」原作は、有田疎石（明治35年〜昭和5年）ですが、その校打者として、この歌を波多放彩が後にこれを取りまとめたものと思われています。弥富の歌には、弥富風景や歴史・文化といった25句の歌でまとめられ、須佐町誌にも掲載されています。



県道脇にぽつんと建つ顕彰碑

昭和中期の林産業

林産物の中で、木材は旧須佐町で見ると昭和27年度に15万石も切っているが、主に建築用、枕木用、薪、木団などに使われている。枕木は筑豊炭田、宇部炭田方面へ、その他の木材は、江津、ほうき大山、静岡など（チップ原料が多い）に送られた。木炭は、主に阪神方面へ、薪は阪神や静岡方面に送られ、竹材は萩市の日東製紙工場、建築用、竹工場（釣竿、かご）などに使われる外、海苔養殖に使われてくるなど、林業振興の中心になってきていたが、安い材料が外国から輸入材により、町内の林業自体が衰退の一途をたどるようになりまた。（須佐町誌より）

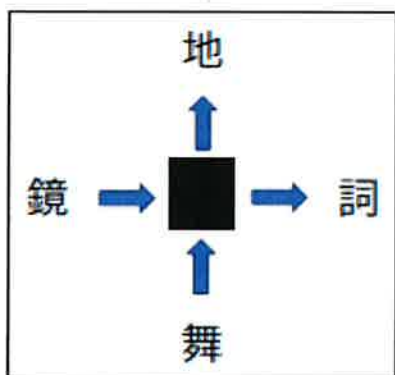
お家時間を楽しく過ごそう！

さあ、このコーナーは、『クイズ』で楽しみましょう！

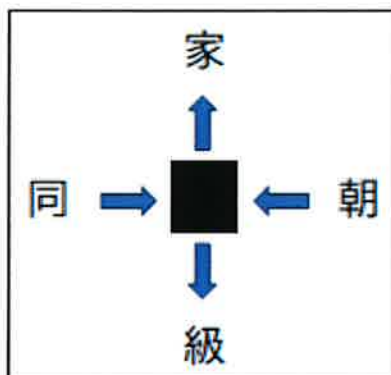
今回も「漢字クイズ」です。それでは：

次の①～④の■に入る漢字を解き、解いた4つの■でできる「四字熟語」を作りなさい。（答えは、最終ページに記載）

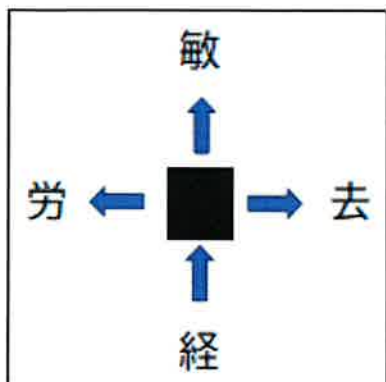
①



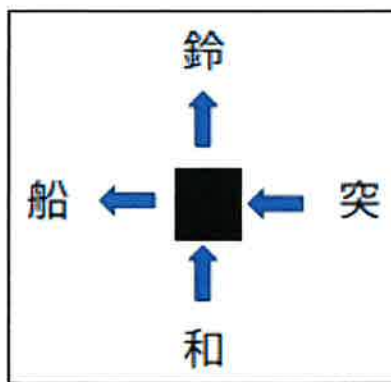
②



③



④



第42回 須佐美術展作品募集!

- 会 期 11月1日(日)～5日(木)
- 場 所 須佐公民館・須佐文化センターロビー



- ・応募資格 須佐地域内及び周辺に在住している者及び勤務している者
- ・出品企画 展示の可能なものであれば、形式、寸法、重量、材質等は問いません。
「書」については、額、枠、屏風、軸仕様にてお願いします。
「写真」については、パネル張りまたは額装にてお願いします。
応募作品には、必ず展示用金具・ひもなどを取り付けてください。
- ・出品料 無料
- ・応募にあたっての留意点
応募作品は1人5点程度まで。
出品作品には、所定の出品票をはりつけて出品してください。
(出品票は、須佐公民館、弥富公民館各窓口にあります。)
- ・作品搬入は、10月19日(月)～23日(金)
- ・作品搬出は、11月6日(金)午後1時から行います。



昨年の作品から

※搬入出場所、お問合せは・・・

弥富公民館 Tel08387-8-2044

須佐公民館 Tel08387-6-2310 まで

レシピブックキング!

久しぶりのコーナーです。
今回は、須佐公民館で開催している「韓国カフェ」から、家庭でもできる韓国の料理を紹介します。

《サムゲタン》

サムゲタン(参鶏湯)は、韓国の伝統的なスープ料理です。



もともとは、内臓を取り除いた若鶏の腹の中に、もち米、高麗人参、ニンニク、ナツメを詰めて長時間じっくりと煮込んだ料理のことです。

今回は、家庭でも作れるよう、スープの作り方を紹介します。

■材料(2人分)

鶏手羽元6本、もち米大さじ4、
ごま油大さじ1、長ネギの青い部分1本分、クコの実(適量)、むき栗1パック、ニンニク2〜3かけ、水750cc、酒1/2カップ、塩小さじ1/3

(薬味)三つ葉、ネギ、塩、荒挽きくろ胡椒…各適宜。

■下準備

- ・もち米は、予め20分水につけておく。鍋に入れる前に水を切り、ごま油を絡めておく。
- ・ニンニクは皮をむきつぶしておく。
- ・ネギは、小口切りにする。

■作り方

- ①クコの実と薬味以外の材料を、鍋に入れる。
- ②最初に、鍋を強火にして沸騰したら、弱火にする。
- ③アクをしっかりととりながら、弱火で30分炊く。
- ④30分炊いたら、クコの実を入れて、さらに弱火で10分炊く。
- ⑤出来上がり。



スープがいっぱいでたべやすそう・・・

※「クコの実」の代わりに「干しなつめ」を使っても美味しいです。

生涯学習作品コーナー

第35回生涯学習発表会作品紹介



日本画
「ホルンフェルス」

柴田壽子（水海）

色鉛筆画
「落柿舎」

山縣セツ子（松原）



【俳句】

猛暑にも負けぬ烈しき蟬しぐれ

（山根丁東） ゆめはるか

【短歌】

爪先にくろんと丸く団子虫

じつと静にその時を待つ

（青葉台） 田村雅利



久々に訪れし甥子の手土産は

心にしみる寿司三昧

（山根丁東） ゆめはるか



大塚 均（1911－1998）

SL 切手シリーズ9600形・C51形

SLシリーズ切手は、蒸気機関車（SL）を題材にした記念切手シリーズです。1974年から1975年にかけて発行されたもので、全10種で構成されています。

第4集は、北海道などで活躍した9600形と、初めてテンダー式にしたC51形がデザインされています。C51は初期の幹線旅客機として知られています。昭和50年5月15日20円記念切手が発行された。大塚均63歳筆の作品です。



このコーナーでは、切手デザインの大家である大塚均（山根丁東出身）さんがデザインされた約120点の作品を随時紹介しています。

切手カバー図案も合わせてお楽しみ下さい。

須佐の偉人伝 大塚均

114

